

第26回エッセンシャルセミナーへの参加

2024年2月21日

■開催概要

2024年2月21日、公益社団法人日本交通計画協会主催、当研究所共催により、第26回エッセンシャルセミナーが開催され、三重野真代客員研究員、矢内直子研究員、高橋靖史研究員の3名が登壇しました。

●テーマ

『人と多様なモビリティが共生するゆっくりを軸としたまちづくり』～オーストリア調査報告を中心に～

●講演

講演者：三重野 真代

当研究所客員研究員・東京大学公共政策大学院 特任准教授
矢内 直子 当研究所研究員

高橋 靖史 当研究所研究員

三浦 清洋 公益社団法人日本交通計画協会

●クロストーク・質疑応答

コメンテーター：宇都宮 浄人 関西大学経済学部 教授

■オーストリア調査の概要から

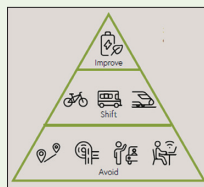
本セミナーは、当研究所が2022年度から取り組む“人と多様なモビリティが共生する安全で心ときめくゆっくりを軸としたまちづくり”調査の一環として、2023年8月25日～9月3日にオーストリアを訪問した報告からスタートしました。現地調査では、Begegnungszone（ゾーン20、出会いの空間）などと呼ばれるまちの速度を下げて、まちの活性化やモビリティや暮らしの質の向上を図る取り組みについて現地政府などにヒアリングするとともに、その空間で人々が憩い楽しんでいる様子や、それらと多様なモビリティサービス・車両との関係について現地視察を行いました。

■講演

まず三重野客員研究員より、オーストリアの交通政策、「ゾーン30」「出会いの空間（ゾーン20）」「生活の道」といった都



三重野客員研究員



持続可能なモビリティ開発方針
(出典:モビリティマスタープラン2030)

市部の道路の低速化の取組み、環境意識の高まりの例として「クlimaaktiv (Klimaaktiv、オーストリア政府が掲げる気候変動に対してアクションを起こしていこうとする概念)」や「UVARs (Urban Vehicle Access Regulations、都市部の車両通行規制)」等、環境によいモビリティが選択されるよう行動様式の転換を促す施策を紹介しました。また、リンツ中央広場で撮影したストリートピアノ演奏の様子を動画で紹介し、「出会いの空間」を導入することで車の進入が抑制され、人や自転車、トラムの往来はありながらも、ピアノ演奏を楽しめる静謐で一体的な空間が担保されていることに感銘を受けたと語りかけました。

紹介し、「出会いの空間」を導入することで車の進入が抑制され、人や自転車、トラムの往来はありながらも、ピアノ演奏を楽しめる静謐で一体的な空間が担保されていることに感銘を受けたと語りかけました。



ストリートピアノとトラムとまちのにぎわい（中央広場、リンツ）

具体的に都市を紹介するパートでは、三浦清洋氏が、ウィーンのリンク環状道路で車、路面電車、グリーンスローモビリティ、馬車といった多様なモビリティが共生する様子、また「マリアヒルファー通り」や「ラングガッセ通り」を現地調査し、歩行者専用空間と「出会いの空間（ゾーン20）」を組み合わせる、あるいはパークレットや駐輪場を左右に配置して道



三浦清洋氏

路をクランク状にする等、物理的に車が走行しにくい環境に整え、通行量と速度を抑制しつつも、決して車を否定せず、人と「共生」させる空間再編を行った取組みを報告しました。

また、ユーロヴェロ（EuroVelo）のルート6を紹介し、古城やブドウ畑を眺めながらドナウ河沿いを自らも楽しく走行する様子や、自転車初心者であっても迷わず安全に、高齢者のグループでも走行可能なルートが整えられている様子を報告しました。



マリアヒルファー通り 自動車中心から歩行者中心への再編

矢内研究員は、リンツのラント通り（Land Straße）で撮影した、トラム乗降のために車道が嵩上げされた電停の様子を紹介し、車が優先ではなく、歩行者と車が等しい存在と捉える「出会いの空間」のコンセプトが感じられると述べました。続いて、アルプスの美しい小村ヴェルフエンヴェングを紹介し、“Car free holiday”、さまざまなEVモビリティやサービスを利用して、車を使わなくとも移動に困らずに休暇を楽しむコンセプトを掲げ、持続可能性と環境に配慮したアルパ



グリーンスローモビリティでアルプスを楽しむ（ヴェルフエンヴェング）

インパール（Alpine Pearls、地方自治体の国際ネットワーク組織）の取組みを報告しました。

高橋研究員は、ザルツブルク旧市街に広がる歩行者専用空間を取り上げ、通過交通などの進入を防ぐライジングボールドが設置されている様子や、まちなかで路面にマス目を書いた巨大チェスや音楽演奏、カフェを楽しむ人々の様子を紹介しました。また、アクティブモビリティ（徒歩や自転車など人力による移動）の推進や、自転車のインフラ整備により、交通分担率を車優先からシフトさせていく取組みについて報告しました。続いて、観光客の公共交通の利用を進めるインスブルックでは、ホテルに2泊以上宿泊すると提供される公共交通が乗り放題の“Welcome card”や、普段着のまま、まちなかからケーブルカーとロープウェイを乗り継いで、一気に標高2000m級の山の頂にたどり着けるアクセスの良さを紹介しました。



上：巨大チェスを楽しむ様子
下：カフェで語らいを楽しむ様子

■クロストーク・質疑応答

会場との意見交換を行うクロストークの冒頭では、『人と多様なモビリティが共生するゆっくりを軸としたまちづくり』の発表を受け、宇都宮教授から下記のコメントをいただきました。



宇都宮教授

〈ウィーンの公共交通〉

かつてはまちなかに車が溢れていた時代があり、それを整えた結果が今のまちの姿であること、車いすの人がトラムや地下鉄で駅員の手を借りずに乗降できる様子やガラス張りのエレベーターの紹介があり、それが安心、解放感、心理的バリアのなさにつながっているとの説明がありました。

〈シェアスペース〉

「マリアヒルファー通り」の変遷を挙げ、かつて中央を走

行していた路面電車を地下鉄に変え、その後車が幅を利かせたが、その道路空間を更にシェアスペースに再編したものであること、またそういった取組みの結果、ウィーンにおける車の交通分担率が40%（1993年）から28%（2013年）に推移したとの説明がなされました。

〈ウィーン市のスマートシティ戦略下でのアーバン・モビリティ・プラン（SUMP）〉

スマートシティ戦略（Smart City Strategy Vienna）の目的はデジタル化ではなく、最高のQoLを保障することであり、そのために技術革新を用いて天然資源を節約することであると述べました。

ウィーンのアーバン・モビリティ・プラン

- 目的と指標（2013年から25年の数値目標等）
- 1. 公平さ（Fair）
 - ー道路空間はあらゆるユーザーに公平に配分され、持続可能なモビリティがあらゆる人に利用可能でなければならない
 - ⇒あらゆる都市開発プロジェクトにおいて、自転車、徒歩、公共交通の空間を増加させる
- 「費用面から、ウィーン市民のモビリティを制限することがあってはならない。・・・365ユーロの年間定期は一つの方法・・・」
- 2. 健康（Healthy）
 - ー日常生活におけるアクティブ・モビリティ（徒歩・自転車）を増やし、交通事故を減らす
 - ⇒1日のアクティブな動き（徒歩、自転車）の時間を23%から30%に

ウィーンのアーバン・モビリティ・プラン

- 3. コンパクト（Compact）
 - ー移動距離はできる限り短く
 - ⇒徒歩、自転車のシェアを38.8%から45%に
- 4. エコ・フレンドリー（Eco-friendly）
 - ーモビリティからの汚染をできる限り少なくするために自転車の比率を上げ、公共交通の利用者を増やす。
 - ⇒自動車のシェアを28%から20%に（1995年は40%）
- 5. 強靱（Robust）
 - ー交通手段を自ら保有しなくてもモビリティは確保されるべき。
 - ⇒CO₂排出量を20%削減
- 6. 効率的（Efficient）
 - ー革新的な技術で資源を有効利用
 - ⇒ウィーンにおけるエネルギー最終消費を20%削減

ウィーンのアーバン・モビリティ・プラン （出典：宇都宮教授講演資料）

次に、ウィーンのアーバン・モビリティ・プランについて、「公平さ（Fair）」が目的と指標の一目一番地に据えられていることが大きなポイントであること、また、持続可能なモビリティがあらゆる人に利用可能でなければならない、その哲学が、365€で全線乗り放題の年間定期券の施策等につながっていることを説明されました。また「コンパクト（Compact）」が据えられていることに関して、日本で言われるコンパクトシティではなく、「移動距離をできるだけ短く」が発想のベースにあると述べられました。

2022年の改訂版“Smart City Strategy Vienna”タイトルには“Climate（気候）”が付記され、徹頭徹尾「環境」志向であり、決して技術志向の戦略でないことを強調されました。

ウィーン市のスマートシティ戦略（2022年版）



“Climate”と追記された改訂版ウィーンスマートシティ戦略
（出典：宇都宮教授講演資料）

クロストークの後半では、「オーストリアの事例で日本にもトレース可能な手法」「ゾーン20がまちづくりに与えた影響」「近接した交通環境での事故や責任の取り方」「まちのどの箇所に低速空間を取り入れるか」「こういった低速化の取り組みを突破していくための手がかり」等の質問が寄せられ、会場参加者と講演者とが膝を突き合わせるような雰囲気の中、活発な意見交換が行われました。また閉会後の懇談では、参加者の多くから、「わが国でも新しい運輸と交通まちづくりの可能性を感じた」との意見をいただきました。



左から高橋研究員、三重野客員研究員、矢内研究員



会場の様子